

(様式 3)

平成 24 年度学融合推進センター学融合研究事業 研究成果報告書

研究テーマ名称	在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究 ―ハワイにおける日本文化の受容
応募事業区分	支援区分(A)「戦略的共同研究 I」(a)「共同研究支援」
申請代表者氏名	大久保 純一

○ 研究状況報告

本年度は、本事業に関わって、具体的には下記のプロジェクトを実施した。

- ① ハワイ大学マノア校からの大学院生の招聘と日本における調査・研究報告
- ② ハワイ大学マノア校ハミルトンライブラリーにおけるホーレー文庫を中心とする資料調査
- ③ ハワイ大学マノア校における、シンポジウム” Interpreting Parades and Processions of Edo Japan: History, Culture, and Foreign Relations”および関連事業 (visiting classes (4 クラス), 一般向けの public lecture) の実施
- ④ ハワイにおける日本関係資料、日本人の移民史に関わる展示表象についての調査
- ⑤ 本学大学院生によるハワイ大学マノア校における公開研究会での研究報告  
「Changing Representations: Recent Depictions of the Japanese Internment in Exhibits in Hawaii」の実施。

上記のプロジェクトの内、②は、現在のハワイに所蔵されている、日本に関わる歴史・文化資料の調査にあたる。④は、ハワイにおける日本文化の受容と変容の現状に関わる調査である。また①③⑤は、異文化の解釈・表象をめぐる、とりわけ日本とハワイの関係のなかで着目すべき研究論点の抽出をねらいとしたものである。

これらのプロジェクトを通して、資料そのものに関する調査をおこなったのはもちろんであるが、同時に、ハワイ大学との共同作業において追求すべき論点がかなり明確になった。

これまで、日本とハワイの双方において、それぞれの関心から在ハワイの日本関係資料や、ハワイへの移民送出をめぐる研究が進められてきた。それらは、総体としていえば、素朴に資料や事実を追うものであり、そうした流れは、一応のところ一巡したといえる。そうした事情を背景として、本事業を通じて、これまでの研究過程で見過ごされてきた、日本文化の受容と変容に強く影響を及ぼしてきた、「帝国」としての国家権力など背後にある政治構造や、その下でとりわけ日本人・日系人をサクセス・マイノリティーとして位置づけていく力学が、重要な研究上の論点として浮き彫りになった。

とりわけ重要なのは、本事業を通じて、こうした認識を、日本側の研究者とハワイ側の研究者が、共有したという点である。ハワイを訪れる外国人の数だけを見ると、中国人や韓国人が増えており、またアメリカ全体をみても、アジア研究の軸足は日本から中国や韓国などに移りつつある。そうしたなかで、文化の受容・変容に関わる非常に重要な論点を残したまま、日本文化に関する研究の後継者が減少傾向にあるのが現実である。

こうした点に鑑みたとき、本事業における論点の抽出と相互の共有は、次年度以降の本事業、ならびに今後の日本とハワイないしアメリカ合衆国との間の、日本文化研究と、その媒介の役割を果たす移民の持つ意味をめぐる研究にとって、重要な土台になっていくと

(様式 3)

平成 24 年度学融合推進センター学融合研究事業 研究成果報告書

考えられる。

○ 当該事業年度において達成された研究成果

ハワイ大学の「ホーレー文庫」に関して、とりわけ美術資料についての資料調査を実施し、かつ、日本関係の文書資料等についての全体の概要を把握した。今年度は、ホーレー文庫の全体像を把握し、次のステップに至るための課題を整理した。

美術資料の一部には、日本語や英語のみならず、他の言語（たとえばオランダ語）を日本語で表音表示している記述が含まれているものもあり、さらに詳細な検討を必要とする。また、それぞれの資料についての利用状況や、ハワイにおける理解・解釈のされ方、実際の展示などでの用いられ方については、さらなる調査が必要となる。これは、同一の資料を、それぞれの立場でどのようなコンテキストで理解しようとしているのかを比較対照する作業であり、相互のこれまでの日本文化への関心の持ち方をこれによって相対化することができる。

文書資料等については、ジャンルが多岐にわたっており、それぞれの特徴についての評価とともに、戦後の左翼運動資料のような、そこに存在するに至る経緯と併せた検討を要するものが含まれている。また、植民地期の朝鮮や満州に関わる書籍等も数多く収蔵されており、各々の資料についての希少性の精査と、そもそも韓国併合以降の戦前～戦時期において、大日本帝国の拡大がハワイにおける日本像にどのような影響を及ぼしていたのかを検討する必要がある。これらの精査も次年度以降の課題となる。

さらに、こうした資料調査の成果とともに、今年度の大きな収穫は、とりわけ日本とハワイの関係における文化研究を進める上での、理論面での分析視角が明確になったことである。とりわけクリアな問題として、ハワイ側の研究者とも共有できたのは、①ハワイというアメリカ合衆国の周縁から、非西洋の日本文化をまなざすことの、多重な中心―周縁の関係の持つ意味と問題性をどのように考えるのか、②アメリカ合衆国というひとつの「帝国」のなかに、「良きアメリカ人」になることができたサクセス・マイノリティーとしての日系移民の歴史が「物語」として強固に構築されており、そのなかで「日本文化」や日系移民が把握されるということをどのように対象化するのか、そして③二つ目の論点と関わって、「我慢」や「努力」など「日本人の美德」とされてきたものが、「日本文化」や日系移民を理解するときのキーワードになる場面があることを批判的に分析する必要性、の3点である。これらについては、資料調査と並んで、国際間で論点を共有しながら、さらに検討を進める必要がある。

○ 本研究を基に発表した論文と掲載された雑誌名等のリスト（論文があれば添付）

現状では論文等はないが、シンポジウムの成果はハワイ大学の web ページで公開している。

(様式 3)

平成 25 年度学融合推進センター学融合研究事業 研究成果報告書

研究テーマ名称	在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究 ―ハワイにおける日本文化の受容
応募事業区分	支援区分 (A) 「戦略的共同研究 I」 (a) 「共同研究支援」
申請代表者氏名	大久保 純一

○ 研究状況報告

本年度は、本事業に関わって、具体的には下記のプロジェクトを実施した。

- ① カリフォルニア大学からの大学院生の招聘と日本における調査・研究報告
- ② ハワイ大学マノア校ハミルトンライブラリーなど、オアフ島内における日本関係資料ならびに移民関係資料の資料調査
- ③ ハワイ大学マノア校における、シンポジウム”The Politics of Representation”および関連イベントの実施

上記のプロジェクトの内、②は、現在のハワイに所蔵されている、日本に関わる歴史・文化資料の調査にあたる。③は、ハワイにおける日系人を含むエスニックグループの歴史・文化表象に関する議論を行う方法として、博物館表象の政治性を題材にしたシンポジウムを実施したものである。

○ 当該事業年度において達成された研究成果

今年度は、ハワイに存在する日本文化ならびに日本人移民に関わる資料そのものの調査を実施するとともに、それら資料がハワイに於いて収集・所蔵されていることの意味、ならびにそれら資料が特定のコンテキストで整理・表象されていることの意味を検討した。

ハワイにおいて日本文化が受容は、ハワイの地政学的な位置を背景としつつ、日本人移民の増大に伴う日本なるものへの関心、さらには日本に出自や祖先を持つ者による自らのアイデンティティを確認しようとする動きを、原動力としている。

しかしながら、こうした一連の「受容」のプロセスには、エスニックグループ間の政治・権力・差別の構造を隠蔽したり、日本人移民の歴史をサクセスマイノリティの歴史に収斂させる効果を伴っている。そして、近現代の移民に焦点を当てた日本人・沖縄人の表象においてすらも、ネイティブハワイアンや中国・朝鮮など他の国や地域からの移民の存在は欠落しがちとなる。この実態については、ハワイで実施したシンポジウムの隠されたテーマであり、いくつかの議論が交わされた。

また同時に、人々の間で比較的共有されやすい歴史と、語られにくい歴史の狭間がどのように存在し、そして両者をどのように架橋できるのかという論点の重要性も浮上した。例えば、アメリカ合衆国と日本の狭間に置かれる形で、MIS として太平洋戦争に加わった日系アメリカ人の存在をどのように評価するのか、さらにはそうした事実を、ハワイにおける沖縄人の集まりにおいてこれを取り上げることの「場違い」さをどう受け止めるのかといった問題は、文化表象、歴史研究、博物館活動においてより踏み込んで検討しなけれ

(様式 3)

平成 25 年度学融合推進センター学融合研究事業 研究成果報告書

ばならない課題である。

オリエンタリズムに近い水準の文化・歴史への関心と、政治的なシビアさを伴う水準の関心の間にある距離、そしてその布置のさなかでの特定のエスニックグループをめぐる議論の欠落ないし断絶を、文化表象の現状としてより分析的に把握していく必要性和、それらを踏まえた上で歴史認識として再統合するための方途の検討が、今後とも要求され、これらをめぐって来年度には一定のまとめを行う必要があると考えている。

○ 本研究を基に発表した論文と掲載された雑誌名等のリスト（論文があれば添付）

現状では論文等はないが、シンポジウムの報告書を作成するべく、シンポジウムのテープ起こしを実施するとともに、内容の編集作業を行っている。